

超大型の弥生勾玉

小山 雅人

1. はじめに

1985年5月の北九州市の岡遺跡、1993年4月の東京都板橋区の上野地区遺跡、同年末の奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡と、ここ10年ほどの間に、超大型の弥生勾玉の出土が相次いだ。同時に、それほどの注目は浴びないが、通常の大サイズの勾玉の出土例も急増の一途を辿っている。弥生勾玉の分布は、長崎県の島嶼部から北海道の南部に及ぶ。

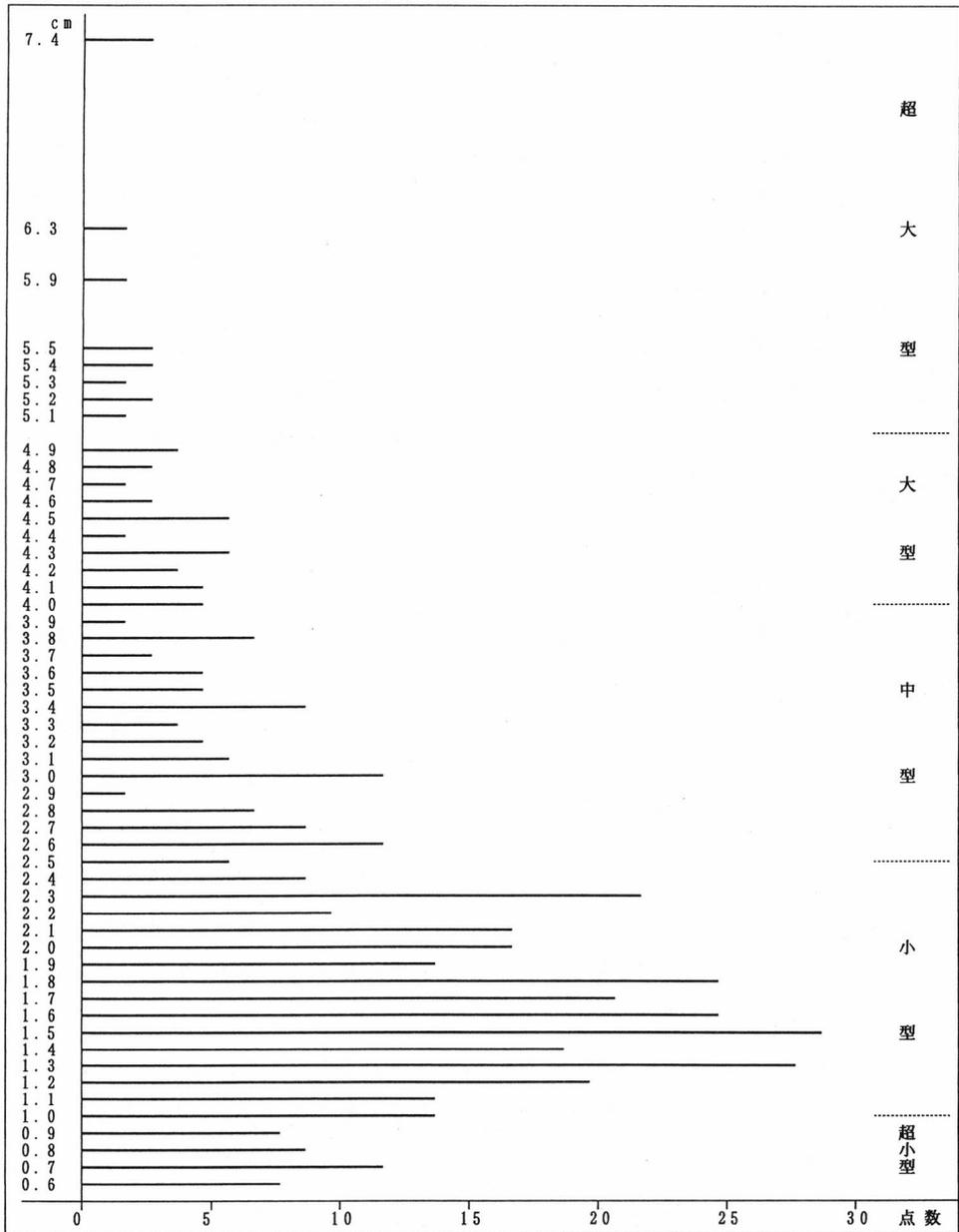
しかし、同じ名前ではばれながら、これほどの個体差がある遺物もあまりないであろう。最大が全長で7.4cm、最小が同じく0.6cmと実に12倍の格差がある遺物である。重さにすれば300倍は超えるであろう。本稿では、弥生勾玉の法量分布を調査し、超大型品と言えるものを抽出し、その特質について考えてみたい。

2. 弥生勾玉の大中小

勾玉の大きさを集成するにあたって、見た目の大きさを最も反映し、報告資料に記載される確率が最も高く、実測図からも容易に数値を得られるのは、全長である。手元の資料で、全長が明らかなものは422点である。先に触れたように、最大と最小は現段階で7.4cmと0.6cmであるから、ミリ単位で69段階に分けられる。その結果は、第1図の通りであるが、分布の中心は、中間の4.0cm付近にはない。1cm台の後半、1.5cmをピークにして、0.6~3.4cmの分布幅に86パーセントが集中している。つまり、弥生勾玉の大半は、最大例の半分以下の法量なのである。これ以上の大きさを持つものは、大きさに比例して少なくなるが、5.5cmまでで一旦分布が途切れる。これを超える6cm前後以上の勾玉が、弥生最大級と言えよう。

しかし、勾玉の形は多様で、断面が円形の量感あふれるものから、扁平でいかにも貧弱な印象を与えるものまでである。理想を言えば、体積を比較できればよいのであるが、それを記した報告書は、皆無に近い。そこで不十分ながら、重量が報告されている60数点について、全長と重さの関係を見てみる(第2図)。全長0.8cmから2.5cm辺りまでは、長さの差に対して重さの変化が小さいものの、両者は比例している。長さ1cmについて3g程度重

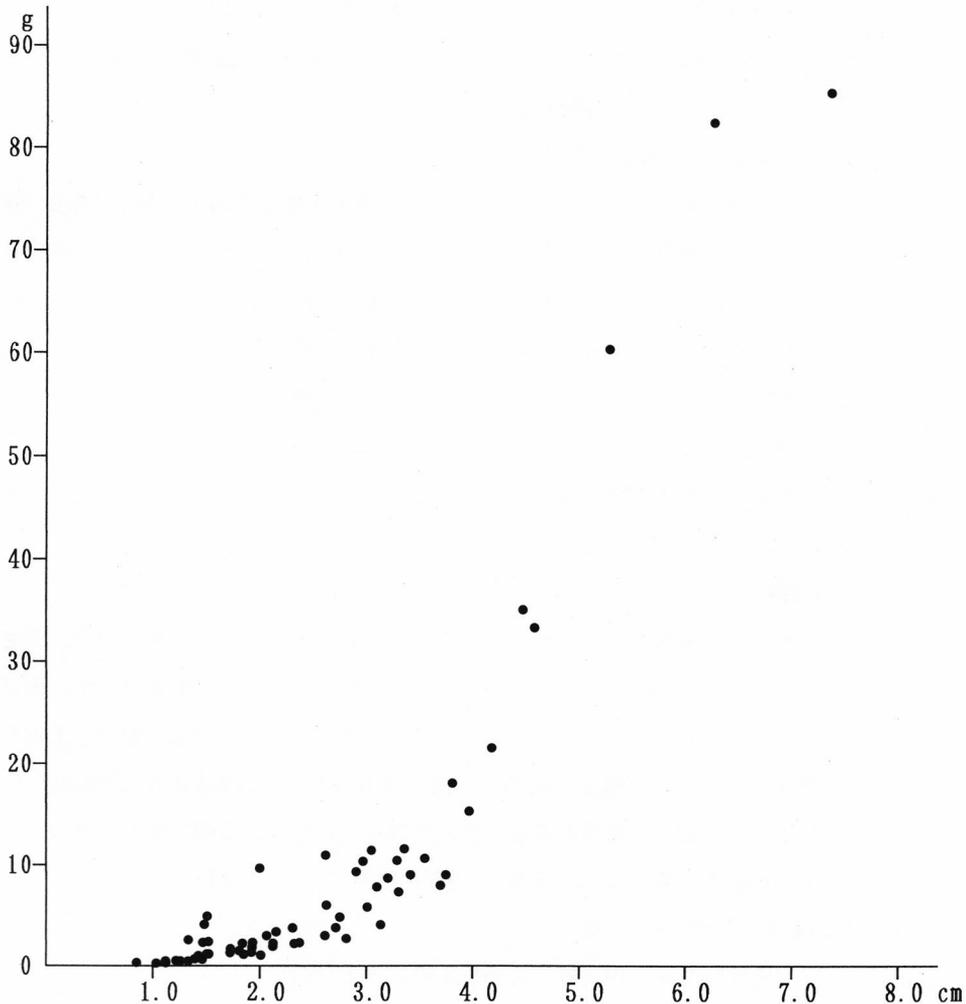
くなる。ところが、2.5cmから4cmの手前辺りまででは、ばらつきが大きくなり比例関係は認め難くなっている。多様な形態と様々な断面形を反映しているのであろう。しかし、全長4cm以上になると、個体数の少ないせいもあって、比例関係が再び確認できるとともに、長さに対して重さの変化が非常に大きくなる。資料が少ないので、確かではないが、1cmの差が20g以上の差になるように見える。



第1図 弥生勾玉の全長分布グラフ

従来、多分に主観的であった大型・中型・小型という分け方も、上述したような全長の法量分布と重量の関係から、2.4cm以下を小型、2.5cm以上を中型、4.0cm以上を大型とし、更に、1cm未満を超小型、ややかけ離れたあり方をする5cm以上のものを超大型という5段階に分ければ、ある程度客観的に報告できるのではないであろうか(第1図参照)。

以上の法量分類の試案によれば、弥生勾玉は、全体(資料422点)の8パーセント(33点)が超小型、63パーセント(269点)が小型品である。中型が19パーセント(79点)、大型が7パーセント(30点)、残り3パーセント(11点)が超大型品となる。要するに、弥生勾玉の半数以上が小型品であり、本稿の対象である超大型品は、全体のわずか2.6%にあたる11点である。しかしながら、福岡県板付遺跡と同県三雲深町遺跡の2点については、牙形とか板付型と呼ばれる扁平な板状の滑石製品である。^(注1) 弥生時代と共に出現し、中後期には、西



第2図 弥生勾玉の全長と重さの関係

日本にも分布する。その意味では、弥生勾玉ともいえるが、むしろ玉というより勾玉形石製品と呼ぶに相応しい。従って、この2点は除いた残り9点を対象とする。

3. 超大型勾玉カタログ

全長5cm以上の弥生勾玉を出土地によって西から東の順にリストアップする(第3図)。

(1) 須玖岡本遺跡D地点(福岡県春日市岡本七丁目)

中山平次郎博士の昭和2(1927)年の採集品であるが、明治32(1899)年に発見されたD地点甕棺の遺物である。長さ5.30cm(尾端僅かに欠損)、胴部幅1.50cm、厚さ1.36cmのガラス製品で、全体に灰白色であるが、先端の欠損部を光に翳すと「美麗なる鮮緑色の透明質から成」ることが判るといふ。3本の刻線をもつ(内1本は不鮮明)丁字頭勾玉である。遺跡は余りにも有名な中期後半の「王墓」であり、伴出遺物については省略する。報告：「爾後採集せる須玖岡本の甕棺遺物」(一)(二)(『考古学雑誌』第18巻第6号、1928)307~333頁・第十二図(同第7号、384~398頁参照)。

(2) 岡遺跡(福岡県北九州市小倉南区山本)

谷地東側斜面部の第Ⅲ層に含まれる礫の間から、1985年5月27日出土。長さ6.3cm、幅2.04cm、厚さ1.85cmの翡翠製で、「エメラルド・グリーンのはスイ輝石が白い綿に溶け込んだ観」と表現されている。81.6gを量る。丁字頭勾玉で、両面穿孔である。谷地包含層Ⅲ層の形成過程として報告者は、南側か東側の集落の弥生中期の生活面が、地滑りか地山崩壊などの自然の営力によって破壊されたと解釈し、勾玉の埋没は、弥生時代中期中頃から後半の時期と考えられている。報告：小方泰宏『岡遺跡』(九州縦貫自動車道関係文化財調査報告16・北九州市埋蔵文化財調査報告書第82集、(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1989)75頁、第52図、86、88~93頁図版19。

(3) 南谷大山遺跡(鳥取県東伯郡羽合町大字南谷字大山・助七峰・峰)

丘陵上の弥生後期~終末期の集落の竪穴住居跡A区S I 01床面から1991年に出土。長さ5.3cmで、材質は流紋岩質凝灰岩と報告されている。刻線を2条もつ丁字頭勾玉で、両面穿孔のようである。S I 01は焼失住居で、後期後半に位置づけられている。報告：米田規人『南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡・南谷22・24~28号墳』(一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ・鳥取県教育文化財団調査報告書32、鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所、1993)16頁、挿図5(j1)、図版51。

(4) 矢藤治山遺跡(岡山県岡山市花尻)

墳丘墓の石室中央付近から、1991年3月10日までに出土(同日付け『毎日新聞』)。尾部が欠損しており、現存長3.7cm(復原長5.4cm)、幅2.0cm、厚さ1.1cmの翡翠製でエメラル

ド・グリーンを呈するという。獣形勾玉で、頭部・足部端に数条の刻線が見られる。終末期。報告：藤原好二・高橋進一他『岡山市矢藤治山弥生墳丘墓』（矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団、1995）59頁、図33、1、図版22(3)。

(5)大井遺跡(香川県大川郡大川町大井)

径13mの墳形不詳の墳丘の小児土器棺墓(合口壺棺)から、1951年に出土。胴部中央以下が欠損している。現長3.3cm、復原長5.5cmの翡翠製で、丁字頭勾玉。頭部の3条と喉部の1条の刻線のほかに、腹部に更に2本残っている。年代は、後期後葉と推定されている。^(注2)報告：六車恵一・藤井直正「讃岐発見勾玉収蔵の壺形土器」(『古文化』1、1962)。

(6)唐古・鍵遺跡(奈良県磯城郡田原本町大字鍵242-2他)

環濠集落のほぼ中央に位置する小溝(『年報』には窪地(落ち込み)とある)から、1993年12月28日までに出土。長さ5.29cmの翡翠製で、全体に薄緑色をしているが、淡い褐色の斑点が混じっている。59.8gを量る。両面穿孔である。弥生時代後期初頭の小溝には、中期後半の遺物も混じり、勾玉もその時期になる可能性もあるとされる。大量の土器と銅鏃1点が共伴した。報告：田原本町教育委員会「平成5年度唐古・鍵遺跡調査成果展」パンフレット；『田原本町埋蔵文化財調査年報』4 1992・1993年度(田原本町教育委員会、1994) 18~20頁。

(7)寺中遺跡(石川県金沢市寺中町)

小型の土墳墓から出土。長さ5.9cm、厚さ1.6cmの石英製の獣形勾玉。両面穿孔である。弥生中期。報告：宮本哲郎他「金沢市寺中町遺跡第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告」(『金沢市文化財紀要』11、1977)。

(8)須多ヶ峯遺跡(長野県飯山市大字飯山字須多ヶ峯7、375番地)

方形周溝墓の主体部、第1号墓墳の底面に密着して、1965年8月9日までに出土。長さ5.1cmの翡翠製であるが、「原石の皮の部分を材料としており、あまり良質とはいえない」とされている。両面穿孔である。螺旋状鉄釧1と箱清水式後半期とされる土器が共伴している。報告：高橋桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓墳調査略報」(『考古学雑誌』第51巻第3号、日本考古学会、1966)44~50頁・第4図6。

(9)四葉地区遺跡(東京都板橋区四葉二丁目)

C地区ラーb 方形周溝墓011の溝付近から、1993年4月2日に出土。長さ7.4cm、最大径2.4cmの翡翠製で、緑がかった乳白色を呈する。84.6gを量る。両面穿孔である。弥生時代終末期の大型(辺19m)の方形周溝墓に伴うものと考えられている。報告：飯牟禮洋子「C地区ラーb検出の方形周溝墓と勾玉」(『四葉地区遺跡 平成6年度年報』、板橋区四葉遺跡調査会、[1994?])36~37頁、写真図版6・表紙4。

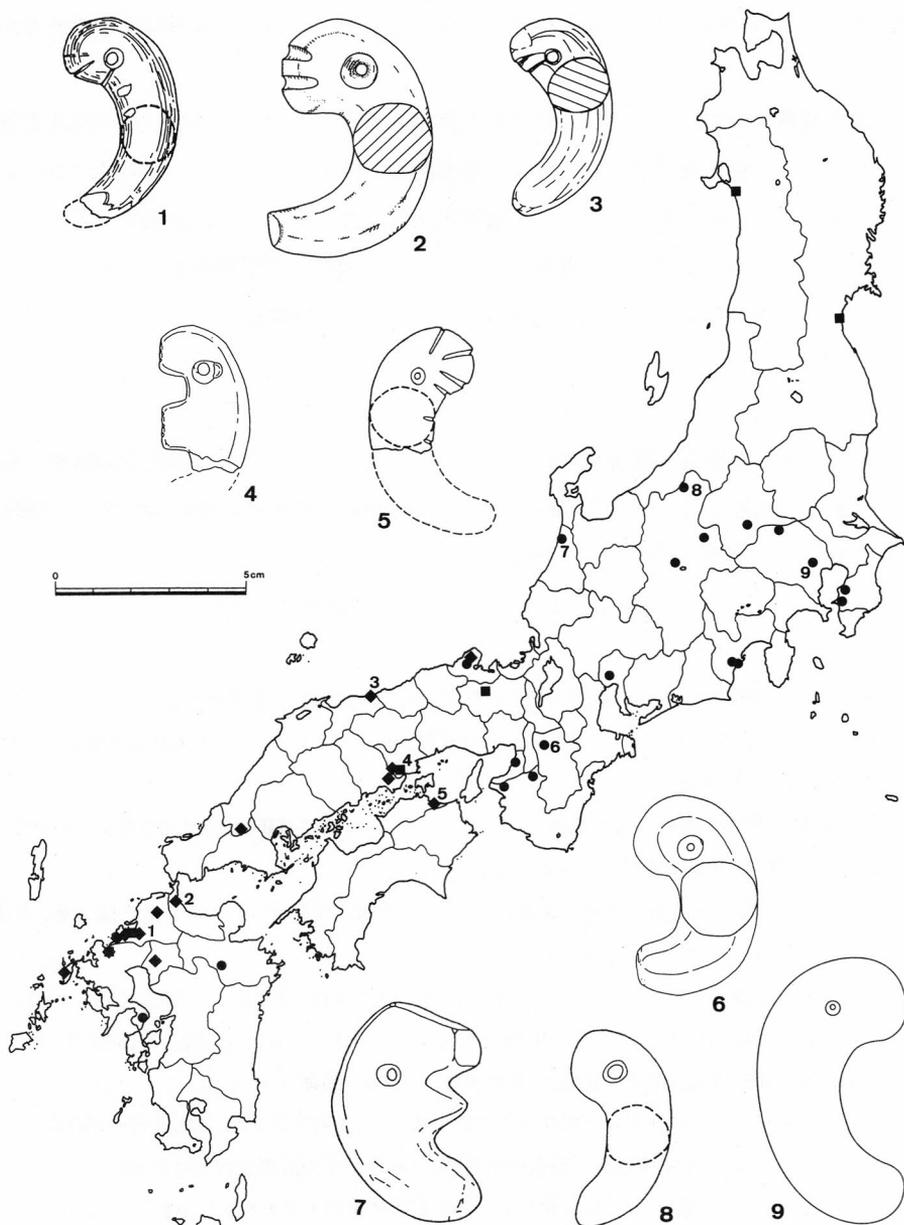
4. 超大型勾玉の分布の特徴

弥生時代の勾玉の分布は全国的である。北部九州・東部瀬戸内・「畿内」・丹後・北陸・千葉など、特に遺跡が集中する地域もあるが、日本列島を大きく九州・西日本(中国・四国・近畿)・東日本(中部以東)3地区に分けると、分布はほぼ均等である。^(注3)出土遺構数で配分すれば、およそ1:1:1となる。

超大型の勾玉の分布は、九州2・西日本4・東日本3となるが、筑紫1・豊1・山陰1・山陽1・四国1・近畿1・北陸1・中部1・関東1のように分ければ、東北以外の各地域で1点ずつ分け持っていることになる。ちなみに4cm台の大型品について見ても、九州12・西日本10・東日本8で、事情はそれほど変わらない。超大型・大型品の分布は、他の全ての勾玉と同様、均等であって、大きな勾玉が特に多い地域はないようである。

ところが、各勾玉の形態を考慮に入れると、顕著な事実が浮かび上がる。即ち、九州・山陰・四国の5点のうち4点までが丁字頭勾玉であり、近畿・中部・関東の4点のうち3点までが素紋ないし素頭なのである。残る2点はいずれも獣形勾玉であるが、山陽の矢藤治山例が九州の吉武高木や宇木汲田遺跡出土例のタイプであるのに対し、北陸の寺中例は近畿の鬼虎川や青野西遺跡の獣形勾玉に通じる形態である。^(注4)我々はこの日本列島の東西の違いを明確に見ることができる。4cm台の大型品に目を移しても同様である。丹後の奈具谷遺跡例が、^(注5)丁字頭である以外、近畿以東の大型品は全て素頭であり(15例)、北部九州・中国出土例は、例外なく丁字頭勾玉(9例)か獣形(2例)、あるいは緒締形(1例)なのである。第3図の日本地図に3.5cm以上の弥生勾玉を、縄紋系(■)・丁字頭(◆)・素頭(●)に分類して、分布状況を示した。近畿北部の一角を境に、西の丁字頭、東の素頭が対峙している様子が見て取れる。

勾玉は弥生時代の段階では、地域色が濃厚であり、それは材質と形態差に現れている。米作りに始まる弥生文化は、西から東へと伝わった。弥生勾玉も例外ではなく、半珠状勾玉などは全国に広がり、各地でその変形的形態を生み出しつつ、終末期まで残った。地域的特色は、特にこの変形的形態に顕著である。北部九州の中期中頃に生まれた丁字頭勾玉は、丹後と伊勢湾までは及んだが、「畿内」地域は取り残された。ついで出現したガラス勾玉は、散発的に「畿内」にも見られるが、集中するのは丹後であり、越前に及び、終末期には駿河に至る。^(注6)このガラス勾玉ですら、九州を離れると地域色を帯びてしまう。^(注7)消費地即ち出土地の近くでの製作を想定するのが自然であろう。翡翠の勾玉の原石の産地は糸魚川に限られるという点を前提として言えば、全国各地の翡翠製勾玉の形態は、一元的供給にしては余りにも地域色が濃い。北陸各地の玉作り工房で、搬出先に応じて形を変えて製作したとは、考えにくい。特注でないとすれば、原石(と工人?)が各消費地に動いたと



第3図 全長3.5cm以上の勾玉の分布と超大型の弥生勾玉

- | | | | | |
|-----------|---------|-----------|-----------|---------|
| 1. 須玖岡本遺跡 | 2. 岡遺跡 | 3. 南谷大山遺跡 | 4. 矢藤治山遺跡 | 5. 大井遺跡 |
| 6. 唐古・鍵遺跡 | 7. 寺中遺跡 | 8. 須多ヶ峯遺跡 | 9. 四葉地区遺跡 | |

しか思われぬ。これに対して、瀬戸内東部の丁字頭や獣形の翡翠勾玉の形態は、九州における形態そのものである。あえて言えば、北部九州で作られた勾玉が伝世しつつ、後期中頃から後半にかけて吉備方面へ運ばれたのではないであろうか。もしそうなら、上述した弥生勾玉の東西の対峙は、後期中頃以前における北部九州の丁字頭勾玉と、その他の地域の素頭勾玉との対峙と言い換えるべきであろう。九州の中部は、素頭勾玉圏であるからである。

尚、出土遺構の性格については、超大型9点中6点までが墳墓ないし、その関連遺構から出土している。特に東日本の3点は全て墳墓関係遺構出土例である。大型品については、採集品もあって、正確を期しがたいが、墳墓出土例が九州で目立ち、近畿では多くは集落関係の遺構に伴っている。総じて近畿の墳墓関係の超大型・大型勾玉は、周溝墓の溝等からの出土で、墓壙から着装品ないし副葬品として出土した例はない。

5. おわりに

数年前に出土した唐古・鍵遺跡の超大型勾玉を実見して、その東日本的な印象が本稿の出発点である。上述したような丁字頭と素頭として現れた東西の差異については、問題の広範さもあって、十分に深めることが出来なかった。

(こやま・まさと＝当センター調査第1課長兼資料係長事務取扱)

- 注1 森貞次郎「弥生勾玉考」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷 国書刊行会) 1980、316頁、木下尚子「弥生定形勾玉考」(『東アジアの考古と歴史』中(岡崎敬先生退官記念論集) 同朋舎) 1987、551~4頁
- 注2 大久保徹也「〈参考資料〉大井遺跡」(『定型化する古墳以前の墓制(第24回埋蔵文化財研究会資料)』埋蔵文化財研究会) 1988、第Ⅲ分冊、85頁
- 注3 小山雅人「弥生勾玉の分布とその変遷」(『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集、埋蔵文化財研究会) 1992、25~28頁
- 注4 小山雅人「近畿地方の弥生勾玉」(『京都府埋蔵文化財情報』第46号) 1992、16頁
- 注5 田代 弘「奈良谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊) 1994、178頁、第152図7
- 注6 藤田 等『弥生時代ガラスの研究』(名著出版) 1994、60頁
- 注7 京都府大宮町の三坂神社3号墓第10主体の定型式勾玉(後期初頭)は、北部九州の須玖周辺の出土例に酷似する(平田定幸ほか『須久唐梨遺跡』(春日市文化財調査報告書第19集) 1988、67頁、図版34(2)など参照)。これに対して、同町左坂墳墓群や丹後町大山遺跡(黒田恭正ほか『丹後大山墳墓群』(丹後町文化財調査報告第1集) 1983、69~70頁、第55図、巻首原色図版)の例は「地方的」な印象を与える扁平な空豆形である。前者は直輸入、後者は地元産という想像をしなくなる。